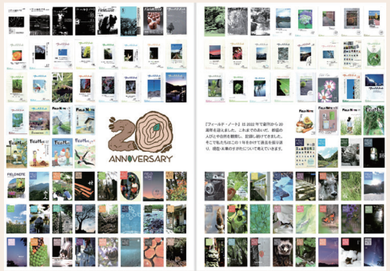
Topic 01　地域交流研究センター発足から 20 年

2003 年 4 月に発足した地域交流研究センターは、発足から 20 年を迎えました。発足以前から本学の学生、教職員と市民との長い交流の歴史があり、さまざまな諸実践が行われてきました。たとえば、右の写真は、都留市でムササビ観察を始めた 1980 年代の石船神社における観察会の様子です。また、同年代には、本学の元学長、大田 堯（たかし）先生による都留市全体を博物館にしよう、という「都留自然博物館」構想も生まれました。こうした多様な実践や思想を受け継ぎ発展させていくために、地域交流研究センターでは、地域の自然や文化にじかに触れ、生きた学びを経験する「都留フィールド・ミュージアム」構想を推進していきます。



Topic 02　『フィールド・ノート』が 20 周年を迎えました

地域交流研究センターの発足とほぼ同時に創刊された『フィールド・ノート』が 20 周年を迎えました。全国から学生が集まる本学で、学生が都留のまちを歩き、自然や文化に触れ、記録し、学び合うことをテーマにしてきました。企画から一連の編集作業すべてを学生が担っています。発行を重ねるにつれ共感の輪が拡がり、現在では市内だけでなく全国に読者がいます。地域交流研究センターの機関誌として位置づけられている活動です。

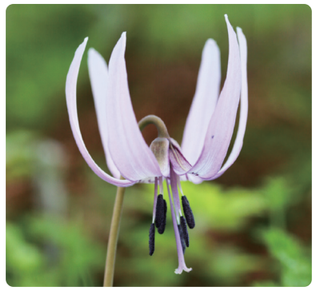
Topic 03　「富士山プロジェクト 2022」に参加しました

10 月 22 日、本学が主宰する「富士山プロジェクト 2022」の富士山学講座としてムササビ観察会を開催しました。参加者は定員一杯の 15 名で、環境 ESD プログラムの実習生 4 名と教員 2 名、事務局 1 名がこの観察会の運営にあたりました。観察場所の都留市今宮神社にはバスで移動し、ムササビが生息している環境やムササビの滑空を観察しました。「ムササビだけでなく参加しているかたたちとも交流ができて楽しかった」といった感想が寄せられました。

お知らせ

多世代・多文化交流などをテーマとした施設構想がスタートしました

都留市田原地区では、都留市が建設をしている田原交流センターが 4 月に完成し、あわせて総合運動公園の整備も始まっています。この場所で、本学による多世代・多文化交流などをテーマとした施設の建設構想が進んでいます。地域交流研究センターや、被服食物実験室や家庭科実験室などの機能が入る予定です。今後も進捗状況をお知らせします。



コラム

春の妖精・カタクリ

皆さんはカタクリという植物をご存知ですか？私たちが料理で使う“片栗粉”は江戸時代末期まではカタクリの地下茎から作られていました。昔は食用とされるほどたくさん自生していたカタクリも今や絶滅危惧植物です。早春の 3 月～ 4 月上旬のみ地上に姿を現し、ピンク色の美しい花を咲かせるカタクリは、春の妖精･Spring ephemeral と言われています。キャンパスでは、自然科学棟の中庭と 1 号館裏の雑木林で 3 月中旬から約 2 週間だけ見られます。（別宮有紀子　学校教育学科教員）

地域交流研究センター
〒402-8555　山梨県都留市田原3-8-1　4号館1階
0554-43-4341（内線606）　ckouryu@tsuru.ac.jp
◀ 左のロゴは、人と人、人と自然の結びつきをイメージして制作しました

都留文科大学 WEB　都留文科大学 twitter　地域交流研究センター twitter

FIELD MUSEUM NEWS vol.03
【発行】© 都留文科大学地域交流研究センター　【発行日】2023 年 3 月 13 日　【編集長】日向良和（共通教育センター教員）
【センター委員】北垣憲仁 / 別宮有紀子 / 日向良和 / 内山美恵子 / 福島万紀 / 山森美穂 / 吉岡卓 / 野中潤 / 青木宏希 / 山本直紀 / 堤英俊 / 佐藤比呂二 / 山本剛 / 邊見信 / 冨永貴公 / 吉田恵理 / 鈴木健大 / 原和久 / 瀧澤悠 / 佐野夢加　【事務局】深澤祥邦 / 杉本涼 / 渡邉愛美 / 大川瑠捺
表紙絵：渡邉愛美（地域交流研究センター事務局）

TSURU FIELD MUSEUM NEWS

都留文科大学
地域交流研究センター
Research Center for Community Collaborations

アカネズミ *Apodemus speciosus*（Large Japanese field mouse）
全国に分布する日本固有種です。本学のキャンパスの森でも出会うことができます。野ネズミのなかでももっとも美しいとされる赤みを帯びた毛が特徴です。堅いクルミの実に丸い穴を開けて食べます。

vol. 03
2023 March

地域交流研究センターとは

地域交流研究センターは、都留文科大学と地域をつなぐさまざまな活動と研究に取り組むための拠点です。地域は、人びとが生まれ育ち、自然とかかわりながら暮らし、文化と歴史を刻みつづけている現場です。そこには、自然・人間・社会のあり方を問いなおす手がかりがあります。地域交流研究センターは、活動を通して、地域全体を博物館（ミュージアム）ととらえる「都留フィールド・ミュージアム」構想を推進していきます。

都留フィールド・ミュージアム

地域交流研究センターでは、地域そのものを博物館（ミュージアム）に見立て、身近な自然や文化に親しみ、じかに触れ、学びあう「都留フィールド・ミュージアム」構想を推進しています。人間探究を掲げる都留文科大学にふさわしいこのような取り組みを受け継ぎ、発展させていくことを目的に地域交流研究センターが発足しました。

地域交流研究センター

地域交流研究センターとは

地域交流研究センターの４つの部門では、自然との共生や教育、暮らしと仕事など地域の現代的な課題に応じて、自然科学や人文・社会科学といった領域を総合した取り組みをしています。学科や学年の枠を超えて参加できる活動が多いのも特徴です。フィールドでの実地の経験は、大学での学びを深める契機になります。2023 年度、後期のおもな活動を紹介します。

見出しマークは？：ニホンリスがクルミの実を食べた痕をモチーフにしています。こうした食べ痕も動物のくらしを知る重要な手掛かりになります。

自然共生研究部門

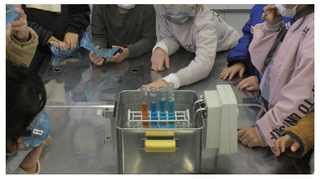
● ムササビ観察バスツアー

ムササビは日没後、30 分ほどすると活動を始める野生の哺乳類です。ムササビが生息する神社で参加者のみなさんと観察し、地域の自然との共生のあり方について考えることを目的としています。案内や解説、ミニ講座などは学生が担当しています。10 月 12 日と 19 日に開催し、「ムササビだけでなく他の参加している方たちとも交流できてムササビについての説明がきけて良かった。楽しかった！」といった感想が寄せられました。（北垣憲仁　地域交流研究センター教員）

● 星空講演会

大学の天文台で星を見てみたい、というリクエストを耳にし、9 月 29 日と 12 月 17 日に本学非常勤講師の古荘玲子先生を講師に迎え、星空観察会を計画しました。9 月は 9 人、12 月は 12 人が参加され、惑星である火星，木星，土星を観察する予定でしたが、両日共に星が見えず、天体望遠鏡や惑星についての講演と、天文台にある口径 30cm の反射式望遠鏡の見学になりました。望遠鏡には歓声があがりました。次回こそみなさんと星の観察がしたいものです。（内山美恵子　学校教育学科教員）

● 谷ニラボ（谷村第二小学校放課後実験教室）



11 月 28 日に行った今年度第 2 回では、「試験管の中で雪をふらせよう」を行いました。塩化アンモニウムと水を入れた試験管を、塩化アンモニウムがすべて溶けるまで湯煎し、その後静かに冷やすと、試験管の中にできてくる結晶がまるで雪が降り積もるように見えます。1 月 30 日に行った第 3 回「静電気のふしぎ」では、乾いたタオルでこすった塩化ビニル管を蛇口から流れ出る水に近づける実験に、子どもたちが特に盛り上がっていました。（山森美穂　学校教育学科教員）

共生教育研究部門

● 地域情報教育

小中学校では 1 人 1 台端末が導入されましたが、どのように教科と結びつけるのが良いのか、また効果的な ICT 機器の使い方とは何か、そのような事でお困りではありませんか？地域情報教育分野では、教科に即した ICT 機器の使い方や、情報モラルに対する指導サポートを行い教員の情報スキル向上に努めています。また，高等学校での情報 I に関するサポートも可能です。Google やロイロの教育者グループに参画している教員もおり、ICT を用いることで子ども達の可能性を引き出し、柔軟で創造的な学びを実現するための連携を進めております。小中高等学校に向けた出前授業も行っております。些細な事でも構いませんので、お気軽にお問い合わせください。（吉岡卓　教職支援センター教員）

● 地域美術教育分野

地域の教育機関とともに造形表現活動をおこないます。本学学生の皆さんと地域の子どもたちが造形表現を通して交流し、互いに想像力を高め合います。参加者全員が造形表現を楽しむことのできる活動にするためには、内容に関するアイデアを出し合ったり、模擬活動をしたりする事前準備は欠かせません。様々な内容の活動を計画して、子どもたちとともにかたちや色を体いっぱいに感じられる楽しい活動をおこないましょう。（青木宏希　地域交流研究センター教員）

● 地域インクルーシブ教育分野

キャリアデザインワークは、発達障害等があったり、生き辛さを抱えたりしている中高生や若者たちを主人公にした取り組みです。思春期をくぐりぬけ、社会の中で自分らしく生きていくことを支えるために何が必要か。学生たちが、参加者の思いや願いに向き合いながら、年間 6 回のワークを企画し実践しました。まとめとして、地域の 6 つの事業所で職場体験を行い、参加者にとって貴重な経験になったと思います。（佐藤比呂二　学校教育学科教員）

● 社会教育分野「つるぶんカフェ」

11 月 19 日（土）、「バンカム、ツル」の 2 階をお借りしてつるぶんカフェを開催しました。今回の企画は中原中也の詩を読み合う「ポエトリー・ミーティング」と題して、講師のトークを聴いたり、詩の朗読をしたり、創作的なワークショップを行いました。参加者からは「いつもの大学の講義とはまた少し違い、レクリエーションのような感じが新鮮」「好きなカフェで詩を読んだり先生のお話をお聞きしたり、自分で詩を作ったりできて本当に楽しかった」「地域交流と文学がつながるっておもしろい」等の感想が寄せられました。（吉田恵理　国文学科教員）

まちづくり研究部門

●「ぷらっとはうす」／観光ツアープロジェクト

富士山麓電気鉄道線「谷村町駅」における放課後の子どもたちの居場所づくり「ぷらっとはうす」は、2022 年度計 33 回実施しました。コロナの影響で 3 年ぶりに定期的開催することができました。観光ツアープロジェクトでは富士急行株式会社及び都留市と連携し、沿線地域の活性化を目指して「都留市のおいしいを巡る旅～ご縁がつなげた人と食～」と題し、市内の暮らしや魅力を体感するマイクロツーリズムを実施しました。（鈴木健大　地域社会学科教員）

グローカル交流研究部門

● 自然観察会

留学生が都留市の自然に触れ、さまざまな人との交流を通して持続可能な地域のあり方をともに考えることを目的として、11 月 12 日、自然観察会を開催しました。今年度は初めての試みで、本学の学生スタッフ 4 名が留学生 7 名を案内して野生のムササビを観察しました。国際教育学科の学生 3 名も通訳として観察会に参加しました。留学生からは「ムササビを見たことがなかったのでとても興味深く、またじっさいに見ることができてとてもよかった」などの感想が寄せられました。右の写真は、観察終了後に参加者全員でムササビのフンを探している様子です。（原和久　国際教育学科教員）

地域交流研究センターのそのほかの事業

● 子ども公開講座

今年度からの新公開講座として「毎日の生活に役立つ楽しいモノづくり」をテーマに、学生・教員・都留市教育委員会の運営サポートの下、小学生が普段何気なく使っている生活の品を手作りし、どうやって作られるのかを楽しく理解する教室が始まりました。第 1 回目として、9 月 24 日に石鹸・キャンドル・サシェ作りを行い、36 人が個性豊かな 3 作品を作り上げることができました。大学生にとっても、小学生との貴重な交流の時間となりました。（舟久保倫加　学校教育学科 4 年・平和香子ゼミ）

● 市民公開講座

令和 4 年 10 月 22 日（土）に、市内の小学生を対象とした市民公開講座「英語であそぼう！」を開催しました。当日は、市内の 5 つの小学校の 1 年生から 6 年生、9 名が参加して、本学の学生が講師を務める 3 つの教室を時間を区切って回り、ゲームやクイズに答え楽しみながら英語を学びました。あっという間の 60 分間で、参加した小学生からは、楽しかったので、もっと時間を長くしてほしい等の感想をいただきました。

● ボランティア事業部

「文大ボランティアひろば」は、学生ボランティア同士のつながる場、地域のボランティアニーズを知る場として、月に 1 度お昼休み（12：30 ～ 13：00）に行っている自由参加の会です。絵本の読み聞かせや、コーヒーボランティアなど、地域でボランティア活動をされている方をお招きし、ボランティアの魅力や、内容について詳しくお話を伺いました。また、参加した学生からの質問にもお答えいただき、有意義な会となりました。

● 出版・広報活動

地域交流研究センターの機関誌が『フィールド・ノート』です。地域交流研究センターの発足と同時に発刊され、学生が主体となって企画から発行までの一連の編集作業を担っています。今年度で 20 周年を迎えました。2022 年 12 月に発行された 112 号では、五感を意識して日常の生活を見つめ直そうと、「五感で楽しむ」と題して特集を組みました。また、2021 年度の地域交流研究センターの活動をまとめた「年報第 18 号」も発行されました。どちらも本学のホームページから閲覧できます。